

CIMの道筋

米国に見る光と影⑩

「実は、土木工事へのBIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）導入には大きな壁があった」と解説するのは米国オートデスク建築事業開発担当のケン・ストウ氏。米国の建築プロジェクトでは分野を問わずBIMが普及しているが、土木は緒に就いたばかり。普及が遅れた

内在する土木の「壁」



米国でも土木工事へのBIM導入は緒に就いたばかり

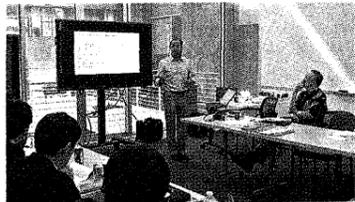
原因は何か。土木プロジェクトは道路事業に代表されるように、施工区間が長いために工事が分割され、部分的に進められる。全体完成がゴールだとすれば「その過程でワークフローが途切れてしま

う。そうした土木工事の特性が、BIMの導入を後ろ向きにさせた」と、ストウ氏は強調する。目的に向かい、関係者がひとつになつて取り組むBIMの必要条件が、障害になった。建築のように構造物単体として生産プロセスが完了すれば、プロジェクト関係者はそれに向かってまい進しやす。デジタル情報はつながつて初めて意味を成すが、部分的では得られる効果は薄い。

こうした土木

試される国交省の本気度

プロジェクトに内在する情報伝達を遮る「壁」を、いかに克服するか。それはCIM（コンストラクション・インフォメーション・モデリング）普及の課題でもある。



ユーザーの導入事例を基に分析するストウ氏

近年の米国では、BIMを導入した土木プロジェクトが増えつつある。これは

事業の発注形態と深く関係している。導入案件には設計・施工一括（デザインビルドDB）方式が目立ち、しかも事業全体をコントロールするPM（プログラママネジャー）を雇い入れているケースが多い。彼らは錯綜する事業のコントロ

ール手段として、BIMを採用しているのだ。米国と明らかに異なるのは、日本が国土交通省（発注者）主導で導入を進めている点だ。調査団の福地良彦（オープンCADフォーラム評議会（OCF）CIM技術委員）は「CIMは一

注目されたのは15年ほど前。成果が顕著に現れやすい建築分野では、施工が効果を認識し、自ら導入を求め動きに発展している。ストウ氏は「これまで土木工事では実績がなく、米国の発注者は導入の根拠を見いだせない状態にあった。

ここに来て成功事例が出てきたことで、ようやく重い腰を上げ始めた」と説明する。CIMの考え方が打ち出され、まだ5年に満たない。国交省は設計から施工へと足早に試行プロジェクトを立ち上げている。米国では10年以上の歳月を経て、土木のBIMが動き出しただけに、その歩みは明らかに速度が違つ。発注者主導で突き進む日本。国交省の本気度が試されることは言うまでもない。一歩先を行く米国に対して「追いつけないことはない」とは調査団の共通認識。彼らには、CIM普及への道筋が見えて

（おわり・西原一仁）

建設通信新聞

【建設ICT】		
1. 日経	2. 朝日	3. 毎日
4. 読売	5. 岐阜	6. 中日
7. 産経	8. 静岡	9. 伊勢
10. 中部経済	11. 建通	12. 日刊工業
13. 建設通信	14. 信濃毎日	15. 日本海
16. 建設工業		

平成25年10月2日(朝)・夕 P3